

雑誌『ユーゲント』の魅力

— 言葉・デザイン・図像 —

井戸田 総一郎*

雑誌『ユーゲント』¹の1896年創刊号からの一揃いが図書館に収められた。雑誌『ユーゲント』は1940年まで刊行されたとの記録が残っており、今回購入したものは1896年から1933年までであり、従って完全なものとは言えない。しかし1934年から1940年までの『ユーゲント』は散逸しており、『ユーゲント』を完全な揃いで保管している施設はドイツでも珍しい状況を考えると、明治大学のコレクションは資料的価値の高いものである。

雑誌のコレクションは、マイクロフィルムやマイクロフィッシュの形態で販売されることが多いが、しかし研究者としては当時のオリジナルの形態で雑誌に触れることができることが一番ありがたい。雑誌の形状やスケッチの色彩、写真の状態それに活字の質などについてオリジナルの雑誌は、当時のアクチュアルな情報を即座に提供してくれる。特に『ユーゲント』の場合、他の雑誌以上に、この点は大きな意味を持っているのである。

『ユーゲント』が創刊された1896年頃は、『パン』あるいは『ジンプリチスムス』などの後世に名を留めるような雑誌が相次いで刊行されているが、そのなかでも『ユーゲント』は産声を上げてから10年後には8万部

*いとだ・そういちろう / 文学部教授 / ドイツ近代文学、日独比較文化論

¹ 明治大学図書館所蔵資料の請求記号・P702/2//D

を優に超える当時としては破格の発行部数を誇る雑誌に成長した。『ユーゲント』は「青春」を意味するドイツ語である。青春というと若者向きの雑誌のように聞こえるが、ここで言われている「青春」は年齢に一切関係がない。「青春」とは、「時の移ろい」から超越し、「私たちの心の奥深くに永久の春を生み、この世の憂いや苦悩を取り去ってくれる聖なる力を持つ青春」である。つまり気力のない若者は「青春」の敵であるが、一方、「髪は白くなれども」心に「いまだ炎を燃やす」者は「青春」の味方だと言われている²。

この雑誌のフルネームは、“Jugend. Münchner Wochenschrift für Kunst und Leben”である。直訳調に訳すと、『青春 – 芸術と生活のためのミュンヘン週刊雑誌』ということになる。副題の「芸術と生活」という言葉に、実はこの時代のテーマが浮き彫りにされている。つまり日常生活と芸術の距離を可能な限り縮めるというテーマである。それは日常生活に芸術を取り込むというベクトルと、芸術に生活的要素を組み込むという逆のベクトルを相互に交差させることを企図していたのである。『ユーゲント』は、さまざまな装飾文字の考案、表紙絵や挿絵に見られる曲線を多用した独自の画風などの斬新なグラフィック・デザインの道を切り開いた。それらは、「芸術と生活」を媒介し、二つの領域をダイナミックに交差させる新しい表現世界の発見であった。『ユーゲント』の人気の秘密は、斬新なデザインと文字表現などを巧みに組み合わせる卓越した感性に求められるであろう。

それではまず、『ユーゲント』の理念を端的に表している図版から見ていこう。口絵 2 (巻頭カラー頁) は、清純な世界と現実の世界との対比を鮮明に描いているものである。上部には裸体の女性と植物が描かれ、女性が手にしているショールの波状的曲線は垂直的・螺旋的な植物描写と一体となって、自然と融合していく身体を表象している³。これに対して、下部は現実の世界を表現しており、「病と毒にとり憑かれ、業罰の沼でもがき苦しんでいる」姿が表象されている。現実の世界では、女性の裸体に「邪悪なもの」を連想するために、検閲などが導入され、「恥部隠しのイチジク

²“Jugend. Münchner Wochenschrift für Kunst und Leben” Nr.1(1896), S.3

³ユーゲントシュティールにおける自然と融合していく身体については、長谷川章:「世紀末の都市と身体 – 芸術と空間あるいはユートピアの彼方へ」の P.24–P.27 を参照。

図版1も『ユーゲント』の批判精神を端的に表している。ここでは、周りを飾る植物の図版と、それに囲まれている文字の部分が共鳴し合うように構成されている。全体のタイトルは「五月(さつき)」。長い冬が終わり、蕾から豊かな花を咲かせつつある植物が鮮やかな黄色で描かれている。詩の一部を訳してみよう -

お日様が地上に射して、
まどろんでいるこの地をやさしく目覚めと導く。
地上は凍りついているが、
緑をもたらす種子は発芽のときを迎えつつある。
君は今まだ捕らわれの身であるが、いつか自由となる。
冬は過ぎ、五月(さつき)は近い⁵。

「凍りついた地上」あるいは「捕らわれの身」という言葉は現実の閉塞した状況を暗示している。これにたいして、その状況を打ち砕き「自由」をもたらす新しい生命の誕生が、植物の描写によって予感されている。この新しい生命をもたらすものこそ、雑誌『ユーゲント』というわけである。

雑誌の理念に関係した図版をもう1枚紹介しておこう。口絵3(巻頭カラー頁)は、1896年10月刊行の40号の表紙を飾ったものである。これは、植物と女性のモチーフを独特なデザインのなかで一体的に描いており、自然との融合を表現した『ユーゲント』の代表的図版の一つ。衣服の線、頭髮、植物の枝や葉の描き方は特徴的である。『ユーゲント』は、ユーゲント様式と言われるグラフィックデザイン・建築などの分野における変革運動の源となった雑誌であるが、この図版は植物的なイメージを重視する新しい運動の特徴をよく表現している。図版の左側には、アルファベットでは珍しい縦書きでJugendと記載され、しかも装飾化された文字のなかに女性の頭髮のウェーブが描き込まれている。現代の目から見ても、斬新な発想だと言えるであろう。因みに、今日のコンピュータ用文字フォントでアール・ヌーヴォー風のは、雑誌『ユーゲント』から模倣したものがほとんどである。このことは、『ユーゲント』が遺産として現代にも生き続けていることを物語っている。

⁵“Jugend. Münchner Wochenschrift für Kunst und Leben” Nr.18(1896), S.287

さて、『ユーゲント』には現実に対する巧みなパロディを多く見ることが出来る。図版2には、中央に聖書を持ち誓いの言葉を導く牧師が立ち、左右に上半身裸体の男女が描かれている。裸体は夫婦の営みを暗示しているが、図版下の「アウフ・ディ・メンズウア!」(Auf die Mensur!)という言葉があることによって、裸体は別の意味レベルに置き換えられることになる。メンズウア(Mensur)とはドイツの古い学生組合のしきたりに従って行われる決闘のことであり、刀剣による傷がすぐに判別できるように上半身裸で戦う慣わしであった。図版下の言葉「アウフ・ディ・メンズウア!」は「いざ決闘へ!」を表している。このような言葉とスケッチの連結は、結婚が決闘の始まりであることを印象的に描いているのである。



Was sprach der „Marquis von Keitth“

Der Mann ohne nitzenbringender Schandthat heissen als den Verthor an Diner eigenen Person.
 —
 Etwas es Frauen betrifft, sind mir Klugheit, Ehrbarkeit, Zuchtbarkeit und Schickheit unentbehrliche Nothwendigkeit, aus denen jezt sich die andern Iren von selbst ergeben.
 —
 Die ich dirand, daß er freien Polzen ansehn und ohne Nothdurft, etwas erlöset, machst du können Dand ver. Die Nothdurft haben diese Schöpfer, wenn man sie nicht in die Welt legt, und nach dem Polzen reifen laubende arme Geisst die Hilfe.
 —
 Sünde ist eine mythologische Negation für tödliche Gesehtze.
 —
 Sei nicht zu offenerbergt! Die Wahrheit ist unter Ephebriner Abergang und man kann nicht laufen genug damit umgehen.
 —
 Dem richtigen Nonpompianer ist kein Verthand nur in die Lage.
 —
 Dem Altersberpfer ist immer die billige Re-fame.

Auf die Mensur!
 Mein Genueserf Knecht man feinen Dand, aber der verdienstliche Herold fühlst dich befehlige, wenn man ihn feinen vermahnt.
 Die Welt ist eine wechselläufige Welt, und es ist nicht leicht, ihr unterzujagen.
 —
 Wie kann kein Hagelst mehr etwas anhaben, Hagelst ist für mich eine glänzende Gelegenheit eine jobe anber. Hagelst kann jezt die haben. Die Welt ist die, daß man es richtig anzuhaben verheißt.
 —
 Da habe niemanden um meine Gesehtze gehen und niemanden kann die Verneidung, die nach meinem Mergle zu gehalten.
 —
 Ehen legt man den Fuß auf den gelassenen Boden, da hat man den Hals in der Schlinge.
 —
 Das einzig richtige Mittel, keine Mitmenschen auszunutzen, besteht darin, daß man sie bei ihren guten Seiten nimmt. Darin liegt die Kunst, offen zu werden, die Kunst, recht zu leben. Die erprobte die Ihre Mitmenschen überzubeden, um in geschäftlicher sündigen die Kunst odern, daß Sie das Nicht auf Ihre Seite haben. Sünden die Ihren Namen mit im Gleichheit einer richtigen Menschen, sondern immer nur in dem von Schanden und Demuthigen.
 Das Leben ist eine Zeitfährde.

Latetische Sprichwörter in der Uebersetzung eines Ehemannes

Per ignem ad carum in hunc die per Ignem! Niemo ante mortem beatus in Hicmond ist von dem Koch bei Schenkungsmutter glücklich zu werden. Paratum mones, venitur ridiculus mit — mit dem Hilt in Ohnmacht und wird noch nur einen neuen Hat.
 —
Uebersetzung von Sereusismus
 In einem Noth bei einem hohen Wohlstande wird auch der Reichthum nach Zeitgenossen ordnen. Ein anber Kan foment Sereusismus mit dem Wohlstande und Zeit, die er sich nicht leisten kann. — die Welt ist, die Welt, es soll eigentlich niemand reicher be.
 —
 Da mein Vater die verhalten feuer die Heibel sind, — es können daß nicht immer lauter Psychologien bei einander heer, — erwiderte Sie, Heibel.
 —
Kulturhistorische Entdeckung
 Gekommen bei den alten Griechen: die liegt die Zeitrechnung der „Jahre“! Hoch über Hittitische Kunst.
 —
 Berlin — „Kronen des Himmels“.
 —
Nus dem Schulmeister eines kleinen Mädchens auf dem Lande
 „Meine Gatte hatte auch eine Dignität; es that mir weiter nichts, das Dignität ge-voten werden!“

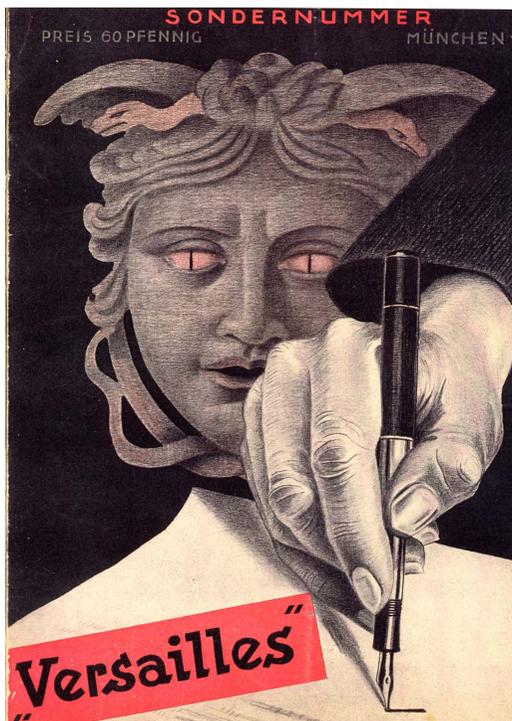
図版 2

さらに図版2の右下には、「夫の翻訳するラテン語の諺」というコーナーが設けられている。結婚の現実に対するパロディが高級な言葉遊びを通して表現されている。例えば、ラテン語の諺「暗闇抜ければ光明あり」(Per aspera ad astra)を、夫は「縁結べば持参金あり」(Durch Ehre zur Gift)と翻訳している。それは結婚の純粹性を茶かしている。「大山鳴動して鼠一匹」という諺は有名であるが、その源がラテン語の諺「山々産気づいて、子鼠一匹生まれる」(Parturiunt montes, nascetur ridiculus mus)にあることはあまり知られていないのではないだろうか。この諺は、前ぶれの騒ぎばかり大きくて、結果はきわめて小さいことの比喩である。図版2で、夫はこの諺を、「女騒ぎ失神するも、ただ新品の被り物欲するのみ」(Eine Frau fällt in Ohnmacht und will doch nur einen neuen Hut.)と翻訳し、夫の側から見た結婚の現実の一端を垣間見せている。この翻訳コーナーは、結婚についての市民的モラルを茶かし相対化するとともに、ラテン語の知識を前提としており、雑誌『ユージュント』の読者層がラテン語の知識を持つインテリ階層にあったことも伝えている。

このような言葉遊びと同じ紙面にヴェーデキントが登場しているのは興味深い。ヴェーデキントは、市民的モラルの埒外にいる娼婦や山師などを舞台に登場させ、市民社会の仮面を暴く戯曲を発表し、官憲の手にかかって投獄もされた作家である。ヴェーデキントは作家であるばかりでなく、自作の上演に俳優として登場することもあり、あるいはギターを手にカバレット・ソングを歌うなど多彩な活動を展開した。ヴェーデキントは1901年に5幕劇『カイト伯爵』を発表したばかりで、その翌年の『ユージュント』に主人公カイト伯爵の語った言葉を短いアンソロジーとして編んだものを発表した。図版2のタイトルが『カイト伯爵かく語りし』(Also sprach der Marquis von Keith)となっているのは面白い。これは明らかに、ニーチェの『ツァラトストラかく語りし』(Also sprach Zarathustra)を連想させるタイトルであり、もとの『カイト伯爵』がニーチェの悲劇論を相対化する意図で書かれたことを読者に意識化させることを狙ったのであろう。『カイト伯爵』はヴェーデキントが自作のなかでもっとも気に入った作品であり、人間と社会にたいする機知と皮肉の宝庫である。

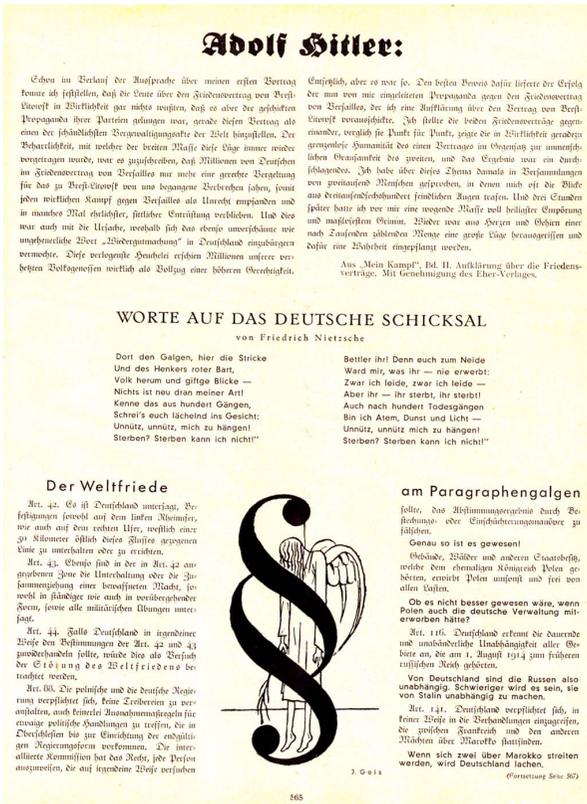
これまで見てきた図版は、『ユージュント』の理想と批判精神が輝かしい

光を放っていた時代のものである。ところで、昔の雑誌が一揃い図書館に収まっていると、雑誌の終末期の姿も見ることができて、興味深い発見に出会える。このような体験の中から、1933年の特別号「ヴェルサイユ」の1頁を紹介したい。ヴェルサイユとは、言うまでもなく、第1次世界大戦の結果、敗戦国ドイツにたいする領地確定や賠償金などの義務を詳細に規定した条約である。この特別号の表紙には、条約を作成するペンを持った手と、その背後に「ゴルゴンの首」が描かれている(図版3)。蛇の目と蛇の髪を持つ「ゴルゴンの首」は邪悪を象徴している。この表紙の構成は、ヴェルサイユ条約作成の背後に、当初からドイツ人にたいする悪意が込められていたことを表象しようとしている。



図版 3

ヴェルサイユ条約にたいする当時のドイツ人のこのような気持ちを、図版4のスケッチはさらに印象的に描写している。まず、条約の各項目を表すパラグラフ記号§が絞首台となっている。絞首台に吊るされているのは、平和の天使である。天使の首にはパラグラフ記号からでている紐が巻きつき、平和の象徴である羽は萎えてしまっている。ドイツ語の優れた単語合成能力を使って、ここでは「パラグラーフエンガルゲン」(Paragraphengalgen)という言葉を生み出している。パラグラーフエンはパラグラフの複数形、ガルゲンは絞首台である。条文が死刑台になっている状況がひとつの単語によって表象されている。



図版 4

さらに図版4の中段にニーチェの詩が掲載されている。この詩はもともと『放浪者ヨーリック』というタイトルを持つ詩である。詩のなかには首吊台が登場し、条文が死刑台になっている先のスケッチと内容的に呼応している。一部を訳してみよう -

首吊り台と縄。
首吊り役人の赤い髭。
やじ馬がきて、はやく殺せと癡猛なまなざし。
おれみたいのを殺してもなにもはじまらない。
こんな風景はなんども見てきた。
いいかおまえら
おれを首吊りにしてもなんの得もない。
おれを殺すのか、おれは殺されたりしない。
おまえら俗物ども
おれが持っていておまえらが持っていないとなると
おまえたちはねたみの気持ちをもつ。
おれは苦しんで苦しんでいるが
死ぬのはおまえら。
百回首を吊られようが
おれは息吹として、かすみみたいに消えない。
おれを首吊りにしてもなんの得もない。
おれを殺すのか、おれは殺されたりしない⁶。

図版4では、ニーチェがこの詩に付けたもとのタイトル『放浪者ヨーリック』は消えて、『ドイツの宿命に捧げる言葉』となっている。この一見すると簡単な操作によって、実はこの詩はもとの文脈からはずされ、ヴェルサイユの状況に移し変えて読まれることになる。つまり、苦しみ悶えるドイツは生き続け、死ぬのはドイツを殺そうとしている戦勝国の方だという檄文のような内容として読むように読者を誘導しているのである。しかもタイトルの下には「フリードリヒ・ニーチェ作」とドイツ語で明記されている。あたかもニーチェが蘇って、檄を飛ばしているように仕向けられ

⁶“Jugend. Münchner Wochenschrift für Kunst und Leben” Nr.38(1933), S.565

ているようである。しかも図版4の上段には、印象的な文字デザインでアドルフ・ヒットラーの名前が刻まれ、『我が闘争』の一節が掲載されている。30年代におけるニーチェ利用の典型的事例と言えるであろう。

『ユーゲント』のなかから数頁を抜粋して見てきたが、この雑誌に関する従来のイメージとは大分異なる印象を紹介できたのであれば、この小論の役割は果たし終えたことになる。いずれにしても、昔の雑誌のオリジナルを見/読することは、私たちに生き生きとした興味深い情報をもたらしてくれる。図書館の書庫で『ユーゲント』のページを少し捲るだけで、20世紀前半期のグラフィック・デザインと文字が織りなす世界を体験できる。ぜひ一度書庫で『ユーゲント』に触れてみていただきたい。

(本論文は、「学燈」Vol.100 No.4(2003年)に掲載した拙論「『ユーゲント』を見/読する」に加筆したものである。)